

10月7・14・21・28日

毎週金曜日 17:30-19:30 (開場17:00)

会場

立命館大学 衣笠キャンパス  
創思館カンファレンスルーム

お問い合わせ

立命館大学 国際言語文化研究所  
《TEL》 075-465-8164 《E-mail》 genbun@st.ritsumei.ac.jp  
《URL》 [http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/lcs\\_index.htm](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/lcs_index.htm)第1回 10月7日(金) **マイノリティを語る — イタリアとフランスのいま**

報告者	栗原 俊秀 (翻訳家)	コメンテーター	山根 美奈 (京都大学)
	石川 清子 (静岡文化芸術大学)	司会	石田 智恵 (立命館大学)
			土肥 秀行 (立命館大学)

第2回 10月14日(金) **フクシマ後の移動 — 政治思想史の観点から**

報告者	宇野 重規 (東京大学)	コメンテーター	野口 雅弘 (立命館大学)
	犬塚 元 (法政大学)	司会	井上 彰 (立命館大学)

第3回 10月21日(金) **難民・移民・アイデンティティ—ドイツの経験**

報告者	梶村 太一郎 (ジャーナリスト)	コメンテーター	佐々木 淳希 (京都大学)
	石川 真作 (東北学院大学)	司会	高橋 秀寿 (立命館大学)

第4回 10月28日(金) **戦後日本における越境者と出入国管理体制**

報告者	朴 沙羅 (立命館大学)	司会・コメンテーター	南川 文里 (立命館大学)
	高野 麻子 (明治薬科大学)		

越境する民 — 変動する世界



企画  
趣旨

今年度の連続講座の総合タイトル「越境する民 — 変動する世界」は、前者が後者の原因であると理解されるならば、誤解を招くことになりましょう。たしかに難民や移民は社会に大きな変動を引き起こしています。EU域内で移動する自由を得たポーランドなどからの移住者に対する反発がイギリス国内の反EUの風潮を高めたため、こうして移民がイギリスのEU離脱を間接的にであれ引き起こしたことを、私たちは目の当たりにしたばかりです。しかし逆に、政情不安と内戦、ジェノサイドを含む民族紛争、グローバルな貧富の格差の拡大と環境破壊の深刻化といった「変動する世界」や、それによって引き起こされたカタストロフィーが、人びとの越境行為を招いていることも自明の事実です。私たちはこのカタストロフィーのなかにチェルノブイリやフクシマの原発事故が含まれていることを忘れてはなりません。したがって今回の連続講座の総合タイトルで理解すべきは「越境」と「変動」の連鎖であって、「……越境する民 — 変動する世界 — 越境する民……」が本来のタイトルであるべきでしょう。

もちろん「越境」と「変動」の連鎖は決して新しい現象ではありません。アメリカ大陸の「発見」の世界史的意義を考えれば一目瞭然であり、資本主義および植民地支配の拡大に伴って、人とモノは容易に国境をこえていくようになります。一方で、国民国家の原理が確立されるにしたがい、越境は違反行為ともみなされるようになります。越境した者はその先の国家に物理的にも精神的にも定住することが求められ、あるいはその国家のなかで権利のないディアスポラとして生きることを余儀なくされ、あるいは植民地主義の支配層となっていきました。しかし、グローバル化と呼ばれる時代になって、越境は例外ではなく、常態となりつつあります。かつてエドワード・サイードは、自分が亡命者であることが特権であり、それを喜びとして感じていると発言しました。この発言は、キャンプ生活を強いられている難民の耳には知識人の戯言として響くかもしれません。しかし越境者を、紛争によって移動を余儀なくされた憐れむべき政治的犠牲者や、国民国家によって管理されるべき「経済的偽装難民」や「不法入国者」、国民経済にとっての損得勘定で評価される「移民労働力」といったような概念で把握される客体としてのみ理解してはならないことを、サイードは教示しているように思えます。むしろ、越境が常態化するなかで私たちは、「越境する民」が変動をもたらす歴史的主体であり、私たち全員が越境する権利をもった政治的主体であるという発想と認識を鍛え上げていく必要があるのではないでしょうか。このテーマを今年度の連続講座で議論していきましょう。

第1回 10月7日(金)

### マイノリティを語る — イタリアとフランスのいま

地中海を渡ってヨーロッパをめざす違法移民船が、連日転覆し多くの犠牲が生じている。この「現代のホロコースト」として地中海世界を覆う大きな影は、「海のむこう」は「こちら」に続くことを再認識させる。だがすでに南欧の国々の日常には、「むこう」の世界がマイノリティという現実として存在する。一般に意識されなくとも、文学は着実に描いてきたことを確かめ議論したい。

第2回 10月14日(金)

### フクシマ後の移動 — 政治思想史の観点から

今日、ヨーロッパやアメリカをはじめ世界の至るところで、移民や難民に代表される「人の移動」が先鋭的な 이슈となっている。その一方で日本では、人の移動による問題は、よその国や地域で起こっている問題との見方が強い。しかし国内に目を移すと、東日本大震災以降、とくに福島第一原発の事故を受けて、多くの人びとが避難や移住を余儀なくされている。本講座では、そうしたフクシマ後の移動をめぐる問題について、政治思想史の観点から考察する。

第3回 10月21日(金)

### 難民・移民・アイデンティティ — ドイツの経験

数百万人が難民として東欧圏から追放された経験を持ち、戦後にトルコ人などの多くの外国人労働力を受け入れながらも、移民の国になることを拒絶してきたドイツは、いまや移民と多文化社会を構築し、現在も多くの難民を受け入れている。この中で生じている社会とアイデンティティの変化を、越境する民とそれに拒絶反応も示しているホスト社会の双方の視点から考察してみよう。

第4回 10月28日(金)

### 戦後日本における越境者と出入国管理体制

現代日本では人口減少や少子高齢化の課題に直面して「移民」政策が議論されることが多いが、現在の入国管理や外国人政策の起源の一つは、「帝国」日本の崩壊と戦後国家としての再出発の時期にあるといえる。本講座では、戦後直後の日本における出入国管理をめぐる制度の確立と、そのなかで生じた越境者の視点から、戦後日本の「移民」政策がいかに人々の移動性と対峙してきたかを議論する。



ACCESS

- 京都駅より ————— 市バス 50、JRバス
- JR・地下鉄二条駅より ——— 市バス 15・55
- 京阪電車三条駅より ——— 市バス 15・59
- 阪急電車烏丸駅より ——— 市バス 51・55
- 阪急電車西院駅より ——— 市バス 205
- JR円町駅より ————— 市バス 15・204・205

- 市バス 15・50・51・55・59にて「立命館大学前」下車/徒歩5分
- 市バス 50・204・205にて「衣笠校前」下車/徒歩10分

